

# 私の好きな一句

なかしまみねお  
**中嶋嶺雄**

国際教養大学学長・  
国際社会学者



現在、私は俳句を作らない。もう半世紀以上も俳句を作っていない。その私と俳句との出会いは、父と俳句のかかわりを抜きに語ることは出来ない。父はもう四〇年以上も前に今の私と同年齢の七十二歳で死去するまで、毎日のように俳句を作っていた。父の師は俳誌『樹海』を主宰していた松村巨湫先生と言って、清貧に耐えて俳句一筋に生き、晩年には「格

はいく」を提唱して、言語と俳句という日本独特の短詩の関係を意味論や音韻論の上からも極めようとした俳人であった。晴陽と号して『樹海』の最高同人であった私の父や草創期の同人の多くは、昭和三年（一九二八）に資文堂から発刊された松村巨湫編『現代俳句表現辞典』に導かれてその門をたたき、昭和初期の俳誌『清淳集』に集い、後に東京田端の巨湫塾に参じた門弟たちであった。信州松本で薬局を経営していた父がしばらく『清

淳集』の編集発行人であったことから、私は子供の頃に巨湫先生に可愛がられた記憶があり、長じてからもよく文通させていた。父の手許に残されていた昭和三年刊の『石楠自選句集』には、「薄っぺらな裁ち切りの短冊のような句」、「醇化の足りない想念」といった巨湫先生の達筆の朱の書き込みが随所に残っていて、当時から巨湫先生はその師白田亜浪麾下の『石楠』一門の作風にはかなり批判的になつていったようである。

父はその巨湫門下にあつて、どちらかといえば伝統的な叙景・抒情型の俳句であつたが、その父の句と並んで、「実柘榴のかつと割れたる情痴かな」のように性や恋を大胆かつリアルに詠った女性俳人の句が巨湫先生によつて撰せられるようになった。その女性が処女句集『春雷』(羽生書房、昭和二十一年)で戦後の俳壇に彗星のように登場し、また風の如く通り抜けてやがて消息不明になつた鈴木しづ子である。ここでは、「私の好きな一句」として、

コスモスなど

やさしく吹けば死ねないよ

しづ子

を挙げておきたい。

父は牧水夫人の若山喜志子先生の知遇も得て、晩年の闘病中は短歌も作っていたが、父の俳句で一句挙げるとすれば、父の死後に私が編集した『晴陽句集』人と作品』(東洋出版印刷、平成二年(一九九〇))の中のこの句が私は好きだ。松本

の中心を流れる女鳥羽川畔の昭和初期の光景を詠んだ句である。

柳絮舞う河岸をゆくなり蕨売り

晴陽

冒頭に述べたように、私は俳句を作らない。しかし、中学生の頃は時々俳句を作っていて、学校の校報や『窓』という生徒会誌には私の俳句が残っている。中学三年生の修学旅行で奈良へ行き、興福寺や猿沢池に感心したときに作った一句はこうであつた。

猿沢の灯の涼しさを宿にいて

嶺雄

間もなく高校生になり、桑原武夫著『第二芸術』論に影響されたり、スタンダールの小説や『恋愛論』を夢中で読み始めた青年時代が私を俳句から遠ざけたのであるが、いま私は再び俳句が身近になりつつあるようなところにきているように思う。

◆次号は詩人のアーサー・ビナードさんです。

## 連載 句の生まれる瞬間

# 遊季りんりん

その四十八

正木ゆう子

まさき・ゆうこ

熊本市生まれ。著書に句集『静かな水』(芸術選奨文部科学大臣賞)、『起きて、立って、服を着ること』(俳人協会評論賞)、『現代秀句』など。読売俳壇選者、『NHK俳句』講師。

## 熊

本の宇土半島の先端に、天翔台という二〇〇メートルあまりの山がある。手軽な高さなので、一〇〇回以上登ったことがあるが、低山といえども、頂上からの展望はすばらしく、そこからの天草の島々の眺めは、天地創造の神話の中に入ったような神々しさである。

内海なので波は穏やかで、照りわたる海原はまるで原初の輝き。その光り輝く海にちんまりと点在する清らかで小さ

な島々を眺めているうちに、ふっと出来てしまった句がある。変な句なので、ためらいつつ総合誌に載せてみると、案外好評。しかし、ある人からの手紙に「冒険も結構ですが、こういう言葉を使うのだけは止めてくれますか。正木さんのイメージが壊れます」というのがあつた。

そうか、困つたな。でもほんとにそう思つたのだもの。

太陽のうんこのやうに春の鳥

ゆう子

残しておきたい季節感しきたり 行事をして日本語の豊かさ

小学館ウイーク

# 週刊 日本<sup>の</sup>歳時記

## 柳芽ぐむむ

定価 580円  
3/24 毎週火曜日発売

4

巻頭エッセイ 四季の思い 大岡 信

今週の歳時記 長谷川 權

季節の言葉 西村和子 宇多喜代子  
解説と名句鑑賞 片山由美子 中原道夫

俳句を楽しむ 山田弘子

京都歳時記 官休庵茶の湯暦

私の好きな一句 中嶋嶺雄

和菓子の歳時記 中山圭子

句の生まれる瞬間 正木ゆう子